

## 生活指導部会

井本 宗近

### 子どもが主人公の学校に―管理主義と忙しさの中で

教師も子どももつらい

限界を超えた忙しさが日常的に職場にあります。ただ細かく書くことを求められる週案、授業改善プラン、研修報告、会議の報告書、自己申告等々きりがありません。心も体も限界にきています。いつ倒れてもおかしくない状況が職場に蔓延しています。

体が疲れると、心が疲れると、子どものさらめきや悩みが見えにくくならないでしょう。

結果をすぐに求められる、きちんとしておけることのできる教師が、すぐれた教師であり評価される。周りの教師にどう自分が見られているか、気になります。

一方子どもたちは、いい子を演じることを強いられています。トラブルが起きた時も、「ごめんね」「いいよ」で終わります。道徳などでは、教師の期待することを推し量って発言することも少なくあ

りません。〇〇小スタンダードで管理を強めれば強めるほど、他方では教師や大人には見せない子どもだけの世界（言葉、価値観、ルール）が、以前より見えにくい形で広がっているように思えます。

幸せになれる教室に

むかしむかし、「先生、今日は私たちの班で食べるんだよ」と、うれしそうに先生の給食を用意してくれる子どもたちがいきました。先生と子どもたちの笑い声が教室に響きました。給食が一層おいしくなりましたとき。

この光景が昔ばなしになりそうなほど私たちは忙しい。連絡帳に返事を書き、プリントを見ながらの食事は日常化しています。

子どもとゆつくりと給食を食べる、それさえも出来ないことに憤りを感じます。

学級は、子どもの本音がぶつかり合っ

て子どもがワクワクする場、集団の素敵

を実感する場、友だちっていいなと感じる場、文化が香る場です。クラスに入ると、そのクラス独特の雰囲気を感じることができるところです。それは子どもと教師が共同で作りに出したものです。「私のクラスはね……。」と子どもが胸を張れるクラスをつくりたいですね。

どこから手をつけましょう。子どもたちが「ヤッター」と思わずさげんけでもう感動や共感がある教室、教師も子どもたちも幸せになれる教室。難しそうです。実践のヒントはあるものです。今の忙しさと職場の中でもできることが。

「今、何ができるか。今、何を大切にしなければならぬのか」立ち止まって少し考えてみる時間が必要なのでしょう。

これだけは自分が教師であるために掴んではなさないというものは、何でしょうか。

生活指導部会は月に一度学習会を開いています。体は少し疲れるけれど、心は軽くなり、明日の課題が少し見えるようになります。（本当かな……）

奇数月は青梅で、偶数月はエデュカスで学習会です。

（共同研究者）